

二年百八歳で入寂して居る其のため有名である。覺如時代猶お存命して居た。その爲め一ヶ寺は覺如の命名で長命寺と號し現存して居る。西念が求道、師を求めて越後に入國し、西念と號した事に就て『東鑑』を検すると建保三年十月十日の下に「越後國檢斷事守護人相共可<sub>レ</sub>致<sub>二</sub>沙汰<sub>一</sub>之旨、西念承之」とあるから今この西念と全く合致する。西念父戰死は文治五年で、さきの入寂時から、逆算すると八歳で、今は三十三歳である。西念、善性の出家が因縁して此の井上一族、夥しく出家し宗祖の教團人となつたのである。かくてこれが常念、教念と結び終に常陸奥郡に及んだのであるが省略する。兎も角、信州井上の飛領、下總磯部の六ヶ寺、所謂、大岩普願寺、笠原本誓寺、久保勝善寺、中俣勝善寺、平出願生寺、長沼西殿寺がのこり駒澤、太田等の地名から考へると井上一族が廣く越、信、武、等に及んで居るのである。

### 僧伽について

櫻部 建

「僧伽」はすなわち佛教教團を意味し、それは廣義には在家・出家を共に含み、狹義には特に出家教團のみを呼ぶ呼稱である、と漠然と考えられていた。ジャイナでも、「僧伽」の語を教團の意味に用い、その場合は、在家・出家を共に含む。しかし、初期佛典には、この語がはつきり在家をも含む意味で用いられている箇所は見當らない。古い韻文經典では、「僧伽」よりもむしろ *savaka* の語が、在家・出家を含めて、佛弟子の意

に用いられた。 *savaka* は、時には、専ら在家の弟子を意味していると解せられる用例もある。

在家・出家は、生活の行儀に相違があつても、同じさとりに入るといふその點では本来差別はなかつた、と考えられる。しかし、阿含經典においてすでに出家僧伽優先の傾向ははつきりあらわれており、在家と出家とに、生活行儀の上の差別のみでなく、證悟の可能性の上の差別をも立てている。多くの場合出家が阿羅漢を得るのに、在家の梵行者は不還を、在家の非梵行者は預流を得るにとどまる、とする。こうして、さらに、在家に説かるべきは信、戒、聞、施、慧であり、在家の行くべき道は斷惑證理のそれではなくて功德による生天の道として示される。

出家僧伽優先の立場が強められるに伴つて、出家性が形式のみを重んじる傾向に進むことが認められる。心が淨ければ「たとえ身を飾つていても」比丘である (*Dh. 123*) といわれたのが、たとえ戒行を保つていても進具を得ていなければ比丘と認められないことになる。

大乘佛教は、一面からすれば、明らかにこのような形式化した出家僧伽主義に對する反動としての在家佛教運動であつたが、それ自體もやがて、歴史の流れの中で、僧團として形式化していつた。

### 淨影慧遠の佛性説

富貴原章信

淨影の慧遠(五二三—五九二)は誌上より二十八の年少であ